岡山県古代吉備文化財センター

所報吉備

第76号　令和6年3月〈年2回 3月·9月発行〉

76

March 2024

Okayama Prefectural Ancient Kibi
Cultural Properties Center

高梁川河川整備事業に伴う発掘調査始まる

酒津（さかづ）遺跡　　倉敷市酒津

酒津遺跡は、高梁川下流の河川敷に広がる、弥生時代から中世にかけての集落遺跡です。高梁川河川整備事業に伴い、令和５年から発掘調査を実施しています。

高梁川は元々、倉敷市街地の北西にある酒津八幡山（はちまんやま）の北側で東西に分流し、瀬戸内海に注いでいました。酒津遺跡のある場所は、東高梁川と八幡山の間にあたり、かつては集落や田畑が営まれていました。明治時代に入ると、高梁川下流域での洪水被害が頻発したため、その対策として明治44（1911）年から大正14（1925）年にかけて大規模な河川改修工事が行われます。この工事に伴い、高梁川流路の付け替えと一本化が行われた結果、遺跡範囲の大部分は高梁川の中州となって現在に至っています。

遺跡のある高梁川の中州（南西上空から）

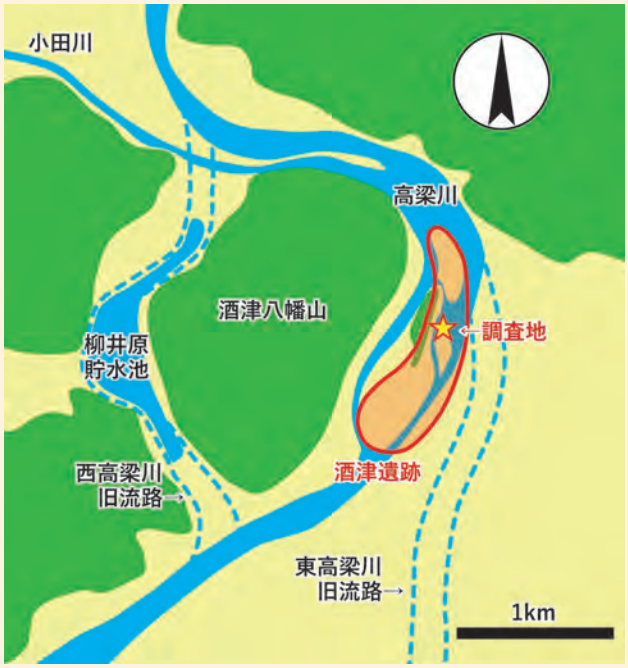
酒津遺跡は、倉敷考古館による踏査や倉敷市教育委員会による確認調査などによって、南北約1.4kmに及ぶ規模であることが判明しており、各時代の遺物も多数出土しています。中でも、弥生時代後期末の土器は「酒津式土器」と名付けられ、備中南部の同時期を代表する土器としてよく知られています。ただ、本格的な発掘調査は今回が初めてです。

今回の調査は、高梁川を横断する「笠井堰（かさいぜき）」の南側にある中州の北端で実施しています。調査はまだ始まったばかりですが、弥生時代中期から江戸時代までの各種の遺構・遺物が見つかり、遺跡の実態が少しずつ明らかになりつつあります。

弥生時代中期の遺構としては、大規模な溝や多数の柱穴があり、集落の存在が想定されます。古墳時代にも集落が営まれ、竪穴住居（たてあなじゅうきょ）や溝（みぞ）などが見つかっています。中でも古墳時代中期の箱式石棺（はこしきせっかん）は、内部に人骨が残り、鹿角（ろっかく）製の刀装具（とうそうぐ）を備えた大刀（たち）などの副葬品（ふくそうひん）から、当時の有力者の墓と考えられ注目されます。中世以降の遺構には、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）や石組みの井戸などがあります。

酒津遺跡の発掘調査は、今後長期間にわたって続く予定です。調査の成果は本誌のほか、ホームページや現地説明会などで積極的に発信していきますので、どうぞご期待ください。

（岡本泰典・杉浦香菜子）



酒津遺跡の位置（略図）

弥生時代中期の溝（北西から）

古墳時代中期の箱式石棺（南西から）

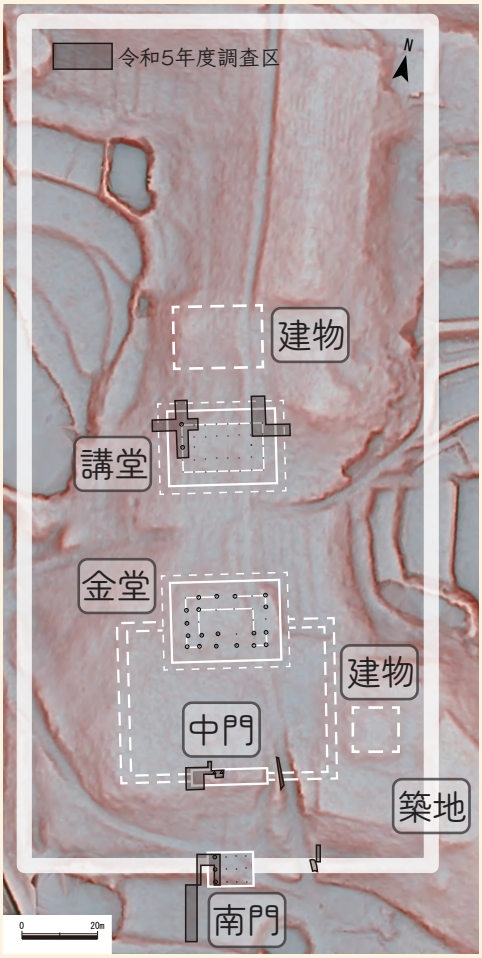
鎌倉時代の石組み井戸（北から）

室町時代の掘立柱建物（東から）

史跡　備中国分尼寺跡

総社市上林ほか

総社市上林ほかに位置する史跡備中国分尼寺跡では、「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業に伴い、令和５年10月から発掘調査を行っています。備中国分尼寺は天平13（741）年に聖武天皇の命によって諸国に建てられた国分尼寺のひとつです。各国の国分尼寺跡では場所が確定しないものも多い中、備中国分尼寺跡は金堂の礎石（柱を支える土台石）や寺域を囲む築地が良好な状態で残されており、その重要性から大正11（1922）年に国の史跡に指定されました。この史跡備中国分尼寺跡は昭和46（1971）年度に岡山県教育委員会が発掘調査を行っていますが、南門の南側に推定される古代山陽道を対象とした調査でしたので、建物などの正確な配置や規模、構造に関する情報はなく、その内容はベールに包まれたままでした。国史跡に指定されてから101年、ついに始まった今回の発掘調査は初の本格的な寺域内の調査となります。このたびの調査では調査事例の少ない国分尼寺の建物規模や構造など新たな知見が得られることが期待されます。



史跡備中国分尼寺跡　伽藍配置

発掘調査では、南門の調査区で南端に露出していた礎石のほか、北へ向かって２つの礎石が原位置を保った状態で検出されました。構築方法としては、基壇（建物の基礎となる土台）を版築（異なる土を層状につき固める工法）によってつくる途中で礎石を据え置いていることが判明しました。また、本調査で新たに検出した２つの礎石に対して、南端の礎石は非常に大きなものを採用しており、南面を意識したつくりが想定されます。

なお、調査成果については、1月27日（土曜日）に現地説明会、1月29日（月曜日）から2月2日（金曜日）に現地公開を開催し、多くの方々にご参加いただきました。

また、備中国分尼寺跡の発掘調査に伴って、古代の製作技術による瓦の復元に挑戦しました。現代では見る機会が少ない古代瓦づくりの1コマをお届けしております。現在、センター公式YouTubeチャンネルにて「土づくり編」・「平瓦編」・「丸瓦編」が公開中です。右の二次元コードからアクセスできますので、ぜひご視聴ください！

（平野友梨）

動画はこちらから

南門の調査区（北から）

製作復元した瓦

高尾宮ノ前遺跡　津山市高尾

一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴い発掘調査を行っている高尾宮ノ前遺跡では、『所報吉備』第75号で紹介した竪穴式石室を埋葬施設にもつ古墳の構造が明らかになりました。竪穴式石室の掘り方は、長さ約2.9m、幅約1.8mの隅丸長方形を呈しています（写真左）。墳丘はほとんどが流失していましたが、斜面下方に一部残存しており、盛土内部からは大小さまざまな石が、集中して見つかりました。これらの盛土内の集石は、土留めとしての役割を持っていた可能性があります。

また、この古墳より北側の丘陵斜面上で、６世紀後半～７世紀代の古墳が新たに２基見つかりました。近接して築かれた両墳はともに円墳であり、古墳の周囲には溝（周溝）が掘られています。斜面上方に位置する古墳の埋葬施設は横穴式石室であり（写真右）、石室周辺から耳環（耳飾り）が出土しました。斜面下方の古墳は竪穴式石室を埋葬施設にもちます。２つの古墳の埋葬施設が異なる構造であることは、とても注目されます。（藤井雄一）

竪穴式石室と掘り方（南西から）

横穴式石室（南西から）

宮坂遺跡　美作市位田

宮坂遺跡は美作市の南西部に所在し、吉野川西岸の丘陵斜面上に立地しています。一般国道374号（美作岡山道路）改築工事に伴い、令和５年８月から10月まで発掘調査を行いました。

今回の調査では、主な遺構として弥生時代後期の竪穴住居1軒、古墳時代後期の土坑墓１基を検出しました。竪穴住居は直径が約5.5mを測る円形で、４本の柱穴がありました。上から掘り下げていくと、床面より少し上の層には焼けた土が多く見られました。床面には炭になった上屋の部材と共に、土器の鉢などや石器の石錘（石のおもり）、石包丁、砥石が１点ずつ残されていました。土坑墓は長さ2.2m、幅86cmを測る隅が丸い長方形の穴で、上のほうから須恵器の杯身、床面近くで鉄器それぞれ1点ずつが出土しました。（氏平昭則）

弥生時代後期の竪穴住居（東から）

古墳時代後期の土坑墓（東から）

令和５年度企画展２

令和５年10月18日（水曜日）から当センター展示室で令和５年度企画展２「岡山県の刀剣―刀剣が語る古墳時代―」を開催しています。

岡山県では令和元年度から４年度にかけて古代歴史文化協議会の14県共同調査研究事業「古墳時代の刀剣類」を実施いたしました。本企画展は当センターが所蔵する刀剣類を展示し、14県共同調査研究事業の成果と刀剣類から分かる岡山県の歴史について紹介するものです。

展示の様子①

展示の様子②

展示室では、剣や刀、ヤリ、鉾などの刀剣類を時期ごとに展示しています。古墳時代前期（３世紀後半～４世紀頃）の鉄剣や鉄刀には百間川原尾島遺跡（岡山市中区）出土の鉄剣形銅剣や浅川２号墳（岡山市南区）出土の鉄剣、南山明地４号墳（倉敷市）出土の鉄鉾などがあります。古墳時代前期は剣が用いられることが多く、岡山県内では刀35例に対し、剣103例が知られています。

古墳時代中期（５世紀頃）の資料は、後池内古墳（岡山市北区）出土の鉄剣や前内池４号墳（赤磐市）出土の鉄刀などを展示しています。全国的に古墳時代中期は前期と比べて鉄剣や鉄刀が長大になり、鉄刀が副葬品の中心になりますが、岡山県では中期まで鉄剣が刀剣類の半数以上を占めるなど、地域的な特徴を示します。

古墳時代後期（６世紀～７世紀）には剣があまり使われなくなり、刀が広く用いられるようになります。またこの時期には、金や銀などで飾られた装飾付大刀が有力者の間で用いられるようになります。装飾付大刀には、鍔や柄頭を鍍金したもの、鞘などに金銅板を貼り付けたもの、刀装具や刀身に線状の金や銀を埋め込む象嵌を施したものがあります。これらのきらびやかな装飾付大刀は製作に高い技術を要することから、中央政権によって製作･配付されたものと考えられます。このように古墳時代後期には、武器は地位や身分を示すシンボルとしても用いられました。

また古墳時代後期の武装の一例として、近年当センターが発掘調査を行った桑山古墳群（津山市）の出土品を展示しています。桑山２号墳の横穴式石室では、素環頭大刀や多量の鉄鏃といった武器類のほか、轡や雲珠など馬に乗るための馬具が出土しています。また桑山３号墳では２～４歳の子どもの埋葬が見つかりました。この子どもには鹿角製の装具をもつ短刀や鉄鏃の束、多量の玉類が副葬されており、集団のなかで特別な地位にあったことがうかがえます。

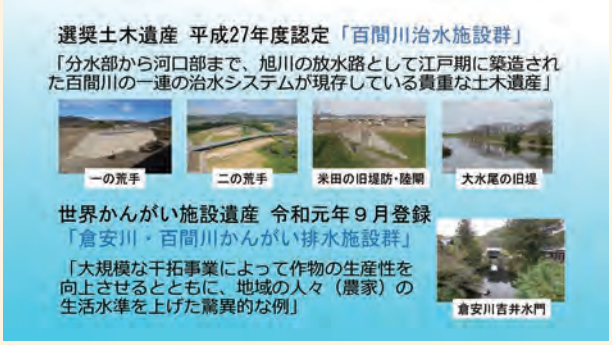
古墳時代の刀剣類について、岡山県は刀剣類の長大化や用途の多様化など、全国的な社会・政治情勢の変化をたどることのできる重要な地域といえます。

会期は令和６年４月14日（日曜日）までとなっています。　（四田寛人）

吉備の考古学講座

当センター職員が日々の業務で培った知識や知見、さらに現在研究中のテーマなどを題材として「吉備の歴史」について発表する「吉備の考古学講座」を、県立図書館多目的ホールを会場として開催しました。第１回は令和５年10月14日（土曜日）に、髙田恭一郎総括参事が「百間川築造を考える－現代に受け継がれる治水施設の調査から－」と題して、百間川築造の背景やその経過を詳らかに紹介し、併せて当センターが実施した百間川の治水施設の発掘調査成果を発表しました。そして、百間川が現代に受け継がれる治水施設であるとともに、江戸時代の治水技術の高さをも伝えているとして、貴重な歴史遺産であると紹介しました。令和６年３月２日（土曜日）に開催した第２回は、松尾総括副参事が「瓦からみる備中国分寺・国分尼寺創建への道のり」と題して、備中国分寺・国分尼寺の創建年代について発表しました。併せて当センターが令和５年10月から「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業の一環として実施した史跡備中国分尼寺跡の発掘調査の最新成果についても紹介しています。

（小嶋善邦）



第１回の発表資料（一部）

第２回の発表資料（一部）

講演会『古墳時代の刀剣』

11月18日（土曜日）に県立美術館ホールを会場にして、講演会『古墳時代の刀剣』を開催しました。当日は奈良大学文学部の豊島直博先生と、島根県立八雲立つ風土記の丘の齊藤大輔先生の両名をお招きし、熱弁を振るっていただきました。

豊島先生は古墳時代後期に盛行した装飾付大刀を取り上げ、その生産、配付主体について説明されました。先生は、双龍環頭大刀は蘇我氏、頭椎大刀は物部氏、圭頭大刀は上宮王家（聖徳太子の一族）が、それぞれ生産、配付したと推定されました。

齊藤先生は刀剣以外にも古墳時代の馬具や鉄鏃などを取り上げられ、古墳時代後期の武装を復元されました。また古墳時代後期における刀剣の地方生産についても触れられ、中央からの一元的な供給とは異なる流通･生産体制について言及されました。

（和田 剛）

豊島先生の講演

齊藤先生の講演

津島遺跡やよいまつり

10月21日（土曜日）･22日（日曜日）に県総合グラウンド内にある津島やよい広場を会場として「津島遺跡やよいまつり」を開催しました。２日間で1,000人以上の方に参加をいただき、今年も火起こしや勾玉（まがたま）づくり、稲の収穫・籾（もみ）すりなどのやよい体験や、復元住居や遺跡＆スポーツミュージアムでの展示解説、広場内に設置したクイズラリーを実施したほか、コロナ禍で中止していた弥生人に変身も行いました。

昨年度に引き続き、岡山県立岡山工業高等学校の生徒の皆さんがボランティアとして参加し、お兄さん・お姉さんの立場で子どもたちの体験の補助をしてくれました。また今回は、津島遺跡の近隣に居住している方々が子どもたちに地域の歴史や文化などを伝えようと結成した「吉備の歴史・文化に親しむ会」が初めてセンター以外の団体として参加し、一緒にまつりを盛り上げました。

（小嶋）

籾すり体験の補助の様子

弥生人に変身（貫頭衣着付）の補助の様子

家族で仲良く勾玉づくり

吉備路ウォーク

令和５年12月２日（土曜日）、総社市にある吉備路風土記（ふどき）の丘内で吉備路ウォークを開催しました。本イベントは備中国分寺（びっちゅうこくぶんじ）・国分尼寺跡やこうもり塚古墳といった吉備路のシンボルといえる史跡を、センター調査員が解説しながら巡るものです。

当日は好天に恵まれ、絶好のウォーキング日和となりました。備中国分尼寺跡では当センターが実施している発掘調査の様子を調査担当者が説明したほか、現在も礎石の残る金堂跡や講堂（こうどう）跡を歩きました。こうもり塚古墳では、普段入ることのできない横穴式石室の中を案内し、センターが令和４年度まで実施した発掘調査で分かったことを解説しました。参加された皆さんからは「詳しい説明を聞きながら歩くと新たな発見があった」「発掘調査の現場を間近で見ることができ、とても驚いた」といった感想をいただきました。

（四田）

日照山国分寺五重塔にて

備中国分尼寺跡の発掘調査状況を解説

おかやまの遺跡を掘る vol.15

―中島遺跡（岡山市中区中島）―

◆『備前軍記』にみえる城ー中島城ー

中島城は、備前国内の争乱を記した軍記物『備前軍記』に記述がある城です。この軍記によると、永禄10（1567）年、宇喜多直家と三村元親が争った「明禅寺合戦」において、城主の中島大炊介は三村氏に加勢したものの裏切り、宇喜多氏に降りますが、それを憤った三村方によって中島城への帰城を待ち伏せされ、殺害されたと伝えられています。平成16～19年に都市計画道路竹田升田線街路改築に伴って実施した中島遺跡の発掘調査で、地名に残る城主名の「大炊」や「屋敷添え」などの小字からおおよその場所が推定されていた、中島城と考えられる平地城館の跡が見つかりました。

中島城は旭川東岸の、周囲より50cmほど高い場所に築かれました。ここは中世山陽道の旭川の渡河地点である「釣の渡」にほど近い、水陸交通の要衝でした。城跡や周辺から出土した遺物から、15世紀後半～16世紀末頃にかけて存続したことが判明し、輸入陶磁器の染付の椀・皿類や、県下では初見の磁州窯系の壺のほか、国産陶器の天目茶椀などからも、この地を掌握していた中島氏の権勢が窺えます。城跡には幅7～10m、深さ3mに及ぶ堀が約50m四方に巡るようです。北半に掘立柱建物群が見つかり、南半は空閑地であったことから、戦に備えた兵が駐屯したのかもしれません。堀からは甲冑の脇板が出土し、銅製の鋲や覆輪などの細工が残ります。また、周辺から鉄鏃や短刀が出土しており、争乱の様子を伝えます。

城が役割を終えても、17世紀前半頃までは輸入陶磁器や唐津焼の椀･皿、織部焼の向付などが屋敷地から出土し、その質、量ともに岡山城下と遜色ありません。しかし17世紀中頃を境に急速にこれらは姿を消していきます。在地領主の城下への集住がすすむことで、この周辺が農村へと姿を変えていったのでしょう。今は閑静な住宅地の一角に佇む中島城跡の看板が、往時を偲ぶばかりです。　（團 奈歩）

中島城跡を望む（南西上空から）

甲冑の脇板

鉄鏃

編集・発行

岡山県古代吉備文化財センター

所在地　〒701-0136　岡山市北区西花尻1325-3
TEL（086）293-3211　FAX（086）293-0142
https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/
https://www.facebook.com/okayama.pref.kodai

◎ 交通案内　JR山陽本線庭瀬駅下車徒歩40分
JR桃太郎線吉備津駅下車徒歩25分
◎ 業務時間　AM8:30～PM5:15
◎ 休業日　土・日曜日及び祝日、年末･年始
◎ 展示室の開館　AM9:00～PM5:00
年末・年始を除き、土･日･祝日も開館しています。
ただし、臨時に休館することがあります。

ひろげよう あふれる笑顔と 思いやり

VEGETABLE OIL INK